

森永貴子

イルクーツク商人とキャフタ貿易—1792～1830年—

序

キャフタ貿易は1727年ロシアと清の間で締結されたキャフタ条約によって成立し、以来シベリア産毛皮を清に輸出するための内陸貿易として機能した。特にバイカル湖を挟んでキャフタ要塞¹に近い距離にあったイルクーツクは商品中継基地としての役割を果たすことで商工地区民を中心とする人口を増加させていった。18世紀を通じてイルクーツクが急激に成長した理由は①東シベリアと北太平洋沿岸地域における行政・軍事・食糧補給の中心であり、前線基地であったこと、②同地の狩猟業における毛皮集散地であったこと、③ヨーロッパ・ロシア、西シベリア、東シベリア、中国国境地帯を結ぶ水陸交通の十字路に位置していたことなど、複合的要因によるものである。

キャフタ貿易がイルクーツク商人の商業活動において重要な位置を占めていたことは、18世紀政府刊行物やこれまでの研究の中で繰り返され指摘されており、一般常識となっている²。しかしこれまでの研究に共通している特徴はキャフタ貿易の制度的・地理的背景の解説、これに参加した有名イルクーツク商人の名前の列挙、もしくはイルクーツク商人の富裕化にキャフタ貿易が大きな役割を果たしたという事実のみの指摘であり、キャフタ貿易に従事するイルクーツク商人の取引規模や品目構成、活動領域などについて具体的研究はほとんど行われていないのが実状である。当時のシベリア商人の商業活動が家族経営を主体としており、会社組織による経営が一部大商人に限られること、契約書を交わす習慣や会計技術が発達していなかったため取引に関する古文書史料を見つけるのが困難であることなど、史料上の制約も大きな要因であった。ただし、キャフタ貿易の取引品目・輸出入総額の変化については中国側でほとんど研究されていないにもかかわらず、ロシアのA・

¹ イルクーツクは1686年に要塞から市 *город* に昇格したが、キャフタは人工的な商業村・国境防衛拠点であり、要塞 *острог*、前哨地 *форпост*、商業村 *слобода* の名称で呼ばれ、政府の公式文書・貿易統計文献では内陸交易地であるにもかかわらず港 *порт* と記載されていた。キャフタが市に昇格するのは1822年である。Шеглов И. В. Хронологический перечень важнейших данных из истории Сибири. 1032-1882 г. Сургут, 1993. С. 94 (Иркутск, 1883.の再版)；Чулков М. Историческое описание Российской коммерции при всех портах. Т. III. Кн. II. М., 1785；Краткая энциклопедия по истории купечества и комерции Сибири. Т. 2. Кн. 2. Новосибирск, 1995. С. 170.

² Миллер Г. Ф. Описание о торгах сибирских. СПб., 1756. С. 231；Корсак А. Историко-статистическое обозрение торговых сношений России с Китаем. Казань, 1857. С. 96；Андреевич В. К. Исторический очерк Сибири. т. IV. Период Екатерининского времени. СПб., 1887. С. 202-211；Кудрявцев Ф. А., Силин Е. П. Иркутск. Очерки по истории города. Иркутск, 1947. С. 47；Силин Е. П. Кяхта в XVIII веке. Из истории русско-китайской торговли. Иркутск, 1947. С. 95；Воробьев В. В. Города южной части Восточной Сибири (Историко-географические очерки). Иркутск, 1959. С. 35-37；Шахеров В. П. Торгово-промышленное освоение Юго-Восточной Сибири в конце XVIII— первой трети XIX вв. Диссертация на соискание ученой степени кандидата исторических наук. Иркутск, 1981. С. 109-110.

コルサク、日本の吉田金一氏のすぐれた業績があり、全体像はほぼ解明されている³。従ってイルクーツク商人の商業活動については、先行研究に加えてイルクーツク市議会文書、ペテルブルグのシベリア委員会文書、モスクワのバスニン文書を中心とする古文書史料を比較分析する必要がある。これらの史料には 18 世紀末から 19 世紀前半にわたる官庁への請願書、税関の徴税・取引記録、商品通過記録などの公式文書史料が多数含まれており、キャフタ貿易の具体像、商人自身の認識、統計史料などの具体的情報を知ることが可能である⁴。

先行研究と古文書史料を比較分析していくことでキャフタ貿易の特徴について興味深い事実が浮かび上がってくる。18 世紀のキャフタ貿易総額は順調に増加していったにもかかわらず、その運営は度重なる貿易中断によって常に不安定な状態であった（表 1）。中断の表向きの原因はロシア・清両国の商人に対する課税問題をめぐる対立であり、さらにその背後にはジュンガル部・ハルハ部など国境未画定地域におけるモンゴル系先住民の帰属争いが外交問題の懸案として横たわっていた⁵。最後の中断期間は 1785 年から 1792 年の 7 年間にも及び、この時期もう 1 つの貿易拠点であったツルハイトゥイ Цурхайтуй で露清貿易が継続されていたとはいえ、イルクーツクからあまりにも距離が遠すぎるために交通が不便であり、取引は少なかった⁶。このため毛皮産業とキャフタ貿易によって成長したイルクーツク商人は貿易中断によって絶えず翻弄された。キャフタ貿易が二度と中断されず、基盤が確かなものになるのは 1792 年の貿易再開以降である。

しかし 1792 年以降のキャフタ貿易における取引品目は急激な変化を遂げた。それまで輸入品に大きな比重を占めていた南京木綿と並んで、茶の輸入が急増したからである（表 2）⁷。さらにロシアから清への輸出品はそれまで毛皮が中心であったが、1830 年代にかけて毛織物（ラシャ）、綿製品などの工業製品が大きく伸びていった（表 3）⁸。このように 1792 年から 1830 年におけるキャフタ貿易の輸出入品目の変化は、イルクーツク商人の商業活動全体に影響を及ぼした。それまでキャフタ貿易はシベリアの産品である毛皮と南京木綿の交換が中心だったが、茶と工業製品の交換へと性質が変化することでイルクーツク商人も事

³ Корсак А. Указ. соч. 吉田金一「ロシアと清の貿易について」『東洋学報』第 45 卷 4 号、1963 年、p. 39-86.

⁴ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Верховным делом Иркутской Городской Управы и Думы, Ф. 308. Оп. 1. Иркутское гильдейское управление; ОПИ ГИМ. Ф. 469. Фонд Баснина; РГАДА. Ф. 183. Список пожертвованный Н. В. Басниных; РГИА. Ф. 13. Департамент министра коммерции, Ф. 18. Департамент мануфактур и внутренней торговли, Ф. 1264. Первый сибирский комитет, Ф. 1265. Второй сибирский комитет.

⁵ 吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社、1974 年、p.162-183.

⁶ Силин Е. П. Указ. соч., С. 67. ツルハイトゥイでの取引記録は残されていないため、輸出入規模は不明である。

⁷ 吉田金一氏の計算によれば、1775、1776、1777、1780、1781 年の清からロシアへの輸入年間平均は南京木綿・下等木綿・その他綿で 63%を占めた。しかし 1802 年以降の輸出入統計では茶の輸入が綿の輸入を上回るようになった。同「ロシアと清の貿易について」p. 50.

⁸ Труды статистического отделения департамента таможенных сборов. Статистические сведения о торговле России с Китаем. СПб., 1909. С. 8.

業内容を転換していかざるをえなかったからである。さらに 1806 年から 1819 年はシベリア総督ペステリ、イルクーツク県知事トレスキンによる商人の流刑・職権濫用事件が頻発した時期であり、行政上の混乱がイルクーツク商人の構造変化に影響を与えた時代でもある。

筆者の関心はキャフタ貿易が安定化し、その内容に変化が生じる 1792 年から 1830 年にかけて、イルクーツク商人の商業活動と構造がどのような変化をとげたのかという点である。この点を解明するために、彼らがキャフタ貿易の利益を確保する上で取った対策について、商人自身による政府への請願書、官僚による要望書・提案書を比較し、貿易が抱えていた問題を検証する。検証を行っていく上でいくつかの問題点がある。第 1 に、1792 年のキャフタ貿易再開前と再開後に生じた毛皮流通の変化である。貿易の中断は毛皮産業にたずさわるイルクーツク商人と、ヨーロッパ・ロシア商人の競合関係、彼等の販路の違いを浮き彫りにした。このことはキャフタ貿易が 18 世紀のロシアの流通構造において極めてローカルな性格のものだったためである。しかしその後のキャフタ貿易の成長は、この貿易をロシア全体の流通と密接に結びつけたものにした。したがって貿易再開によってイルクーツク商人の取引に与えた影響とその要因について、明確にする必要がある。第 2 に、キャフタ貿易が再開されたのち中継交易の担い手となったイルクーツク商人が他都市商人の参入を排除するためにどのような対策をとり、地元の流通においてどのような役割を果たしたか、という点である。中継交易拠点となったことでイルクーツクには様々な地域の商人が集まり、極めて開かれた流通構造を形成した。しかし一方で資金面に勝るヨーロッパ・ロシア商人と競合しつつ中継交易を行っていくには、イルクーツク商人自身の利益を制度面で確保していく必要があった。矛盾した状況を解消していく中で彼らがどのような分野に自身の役割を定めていったのだろうか。第 3 に、キャフタ貿易への参加が第 1 ギルド商人に限定された 1807 年の詔勅以後、イルクーツク商人における第 1 ギルド数は大幅に増加したが、同時に地方行政の混乱と輸出入品目の急激な変化による打撃も被った。この過程で没落を免れて生き残ったイルクーツク商人に見られる特徴と、行政・貿易両面が彼等の構造に与えた影響の違いは何であったのか。以上の 3 点から、この時期におけるイルクーツク商人とキャフタ貿易の関係について検証する。

1. キャフタ貿易の中断と再開

ロシアと清の民間「自由貿易」として始まったキャフタ貿易の取引形態は特殊なものだった。ロシア側は貨幣の流出を恐れ、商品を直接交換するバーター貿易を採用した。このためロシア商人と中国商人はあらかじめ交換比率を定め、中国側の主軸商品である南京木綿をその交換単位基準としていた⁹。これはキャフタ貿易が事実上毛皮と南京木綿の交換だったためである¹⁰。国境を挟んでキャフタの正面 12 サージェン〔≒26m〕先には中国商人

⁹ 吉田金一「ロシアと清の貿易について」p. 49.

¹⁰ 1768—85 年における毛皮輸出の割合は全体の 78.8%であった。Труды статистического

の集落マイマチェン（売買城）があり、ロシア商人と中国商人は毎日集落を往来して取引を行っていた¹¹。バーター貿易という特殊な環境から、キャフタで商うロシア商人たちは現金で関税を納入する事が困難であり、1754年にはシベリア以外のロシア商人に対して6ヶ月期限の普通手形により税金を納入する事が認められた。

しかしロシア政府の緩和措置にもかかわらず、キャフタ貿易はロシアと清の外交問題によってしばしば中断された。主な中断期間は1762—1768年、1778—1780年、1785—1792年の3回であり、数日・数ヶ月間の中断を入れると計10回に及ぶ¹²。このため毛皮の集散地であり、キャフタ貿易で毛皮販売の利益を得ていたイルクーツク商人は中断期間に大損害を被った。当時のイルクーツク商人の北太平洋地域における毛皮産業についてはP.V.マカロヴァの先行研究があり、史料集も刊行されている¹³。貿易中断期間におけるイルクーツク商人の狩猟業については1762年イヴァン・ベチェヴィン И. С. Бечевин がアラスカから53570ルーブルの毛皮を獲得、プロタソフ Протасов が1786年20970ルーブル、1791年171914ルーブルの毛皮を獲得したことが記録されており、また1770年代からは後にロシア・アメリカ会社の基礎を作るリュリスク商人シェリホフ Г. И. Шелихов, クールスク商人ゴリコフ И. Л. Голиков, ヤクーツク商人レベジェフ=ラスタチキン Лебедев-Ласточкин の共同事業が始まり、資本の集中化が起こった¹⁴。北太平洋地域のみならず、東シベリアのレナ川流域は当時リスの宝庫であった¹⁵。未熟な船舶技術による遭難のリスクと隣り合わせであった北太平洋地域での毛皮産業を支えたのは、キャフタにおける毛皮価格がカムチャツカ、オホーツク、イルクーツクにおける価格より2—3倍にもなることによる莫大な利益だった¹⁶。このためキャフタ貿易最後の中断期間である1785—1792年には毛皮産業に関わっていたイルクーツク商人がキャフタ貿易用の莫大な在庫を抱えこむことになった。

この問題について、シベリアに流刑されていたラディーシチェフ А. Н. Радищев による「中国貿易に関する手紙」と題する興味深い報告書がある¹⁷。彼はキャフタ貿易再開につい

отделения департамента таможенных сборов. Статистические сведения о торговле России с Китаем. СПб., 1909. С. 6. 吉田金一「ロシアと清の貿易について」p. 49.

¹¹ Миллер Г. Ф. Указ. соч. С. 41; Паллас. Путешествие по разным провинциям Российского государства. Часть III. половина первая. СПб., 1788. С.182-183.

¹² Щеглов И.В. Указ. соч., С. 153.

¹³ Макарова Р.В. Экспедиции русских промышленных людей в Тихом Океане в XVIII веке // Вопросы географии, история географических знаний. сб. 17. М., 1950. С. 23-42; К истории Росийско-Американской компании. Сборник документальных материалов. Красноярск, 1957. С.9-15.

¹⁴ К истории Росийско-Американской компании...С. 13-15.

¹⁵ Ядринцев Н. М. Культурное и промышленное состояние Сибири. СПб., 1884. С. 15-16.

¹⁶ Макарова Р. В. Указ. Соч., С. 24-26.

¹⁷ Радищев А. Н. Письмо о китайском торге (1792 г.) // Полное собрание сочинений. т. II. СПб., Изд. М. И. Акифиева, 1907. С. 45-102. Александрол・ニコラエヴィチ・ラディーシチェフ（1749—1802）は1790年に自分で出版した『ペテルブルグからモスクワまでの旅』でエカテリーナ2世の勘気に触れた人物として知られる。彼はこれにより死刑宣告を受けた

て、1792年にトムスク、イルクーツクを通過してキャフタの現状を視察した。この旅の途中、彼はトボリスクにいたるまではキャフタ貿易中断の不满がほとんど聞かれなかったと記述している。主な不満は茶の輸入減少くらいで、輸出向けの在庫を抱えてしまった大商人とファンザ、キタイカ、ダバ¹⁸などの中国製の綿・絹製品の購入者たちが貿易中断を残念がった程度だったという。そのうえ絹・綿製品の輸入が途絶えたことはイルクーツク県、トムスク県における亜麻の栽培と地元住民による亜麻布の生産を促した¹⁹。こうしてキタイカの代用品として亜麻がトムスクからイルクーツクへ運ばれ、カンファ、ゴリ、カムキ²⁰の代用にはリヨンの布製品やフランスの流行品がもたらされ、モスクワの工場生産のための絹がペルシア、イタリアを通じてもたらされるに至ったのではないかと推測している²¹。またキャフタ貿易が中断される以前の1775—81年における茶の輸入割合は全体の15.8%であり、ラディーシチェフは輸入される茶のほとんどがシベリア先住民たちの好む磚茶であったことを指摘している²²。当時ロシア人にも喫茶の習慣が広がり始めてはいたが、キャフタ茶の輸入がなくなったことによって輸入先がイギリス、オランダ、デンマークへと変わっただけであり、茶の愛好者は高い金を払ってでもこれらの茶を購入するようになったとして、キャフタ茶の輸入停止を問題視していない。

次にキャフタ貿易で最も重要な商品である毛皮についてもラディーシチェフは輸出ルートの変更を指摘し、問題はなかったとしている。なぜならシベリア産の最高級リスがイルクーツクを経てロシアへ流出し、ヨーロッパ貿易の代価として支払われ、大部分がハンブルグへと輸出され、一部トルコへと向かったからである²³。したがって、それまで東シベリア、キャフタで完結していたイルクーツクの商品流通はイルビート、マカリエフ、アルハンゲリスク、ウスチュグなどの交易ルートへと開かれ、結果的にイルクーツクとヨーロッ

のち10年のシベリア流刑に減刑され、イリムスクへ送られた。「中国貿易に関する書簡」を書いたのもこの流刑時期だった。しかしシベリア流刑といっても官僚としての勤務を伴うものであったことは同報告の記述からも窺える。同報告書ではかつての元老院勤務やペテルブルグ税関長の経験を生かし、イギリス、フランス、ドイツの重商主義政策の成功例を示しながら毛皮を主軸とするロシア・ヨーロッパ貿易について独自の意見を述べている。

¹⁸ ファンザ *фанза* は滑らかなタフタ（琥珀織）の一種、しかし洗濯ができ、非常に丈夫な生地であるため刺し縫いに使われる。この生地から布団やキルティングのスカート、男性用、女性用のスカートが作られる。ダバ *даба* は様々な種類の綿織物で、おもに青いもの。貧しい階層はこれを男性・婦人用シャツ、スカート、テラグレイカ *телогрейка* [古風なサラファンに似た長袖婦人服]、裏地に使った（*Авдеева-Полевая Екатерина. Записки из замечания о Сибири // Записки иркутских жителей. Иркутск, 1990. с. 53. 同書の初版は1837年。*）キタイカは南京木綿のこと。

¹⁹ Радищев А. Н. Указ. соч., С. 73-74.

²⁰ Канфа *канфа* はアトラス（綿織物）の一種で、大きくて非常に丈夫な生地 *Авдеева-Полевая Е. Указ. соч. С. 53.* カムキは花模様の絹のダマスク織であり、ゴリはカムキの一種。

²¹ Радищев А. Н. Указ. соч., С. 84, 87.

²² 吉田金一「ロシアと清の貿易について」p.50. 磚茶はロシア語でレンガ茶 *кирпичный чай* と呼ばれる。これは圧縮されて文字通りレンガ状に固められた固形の低級茶で、沸かすときに少しずつ削って用いた。

²³ Радищев А. Н. Указ. соч., С. 82.

パ・ロシアの商取引がより活発になったとラディーシチェフは結論付けている²⁴。その一方イルクーツク商人アレクセイ・シビリャコフ **Сибиряков** が 1789 年に行った報告によれば、前年度毛皮・その他の商品を取引できなかつたために 800 万ルーブルの損失があり²⁵、ラディーシチェフも大商人たちがキャフタ貿易の在庫に抱えた商品は 400—500 万ルーブルだったと述べている²⁶。1780—1785 年におけるロシアから清への商品輸出額が年間平均約 280 万ルーブルであったことと比較すると（表 1）、この平均額を上回る莫大な損失であった。こうした状況からイルクーツク商人たちはアレクセイ・シビリャコフを通じて「キャフタ貿易再開」「交換された中国商品への関税を減らすこと」「イルクーツク県産毛皮・その他商品の独占権をイルクーツク商人に与える」要望書を政府に提出している²⁷。

上記の事実から、地元商人の損害が大きかつたにもかかわらず、モスクワをはじめとするヨーロッパ・ロシア商人たちはシベリアと西ヨーロッパ諸国との毛皮取引を仲介して莫大な利益を得ていたために²⁸、キャフタ貿易の中断による影響をほとんど受けなかつたと考えられる。特にラディーシチェフは、キャフタ貿易に従事していたイルクーツク商人の多くが大商人ではなく小商人であったことを指摘しており²⁹、彼らは購入した毛皮をヨーロッパ・ロシアに搬送する手段を持たず、それゆえにキャフタ貿易がイルクーツク商人にとって唯一の貿易窓口であるという認識が強かつた。ラディーシチェフ自身、キャフタ貿易の中断がイルクーツクの商品流通に与えた深刻な影響を認めており、キャフタ貿易との関係においてイルクーツクはロシア最良の貿易都市であるとしている。

このようにラディーシチェフは当時のキャフタ貿易をイルクーツク商人にとってのみ必要なローカル交易と考え、その後のシベリア史研究でもこの見方はそのまま踏襲された³⁰。従って毛皮産業の利益という点においてキャフタ貿易はそれほどの重要性をもたなかつたように見える。しかしロシア政府の粘り強い交渉によって 1792 年貿易が再開されると、全く事情が異なつてきた。

1792 年以後キャフタ貿易が安定化し、イルクーツク商人のギルド数は明らかに増加して再び活発な取引を行った（表 4）。しかし同時にキャフタ貿易にはヨーロッパ・ロシアの商人が殺到し、ヨーロッパ・ロシア商人とシベリア商人の地域組織カンパニヤ **компания** は混乱に陥ることになった。カンパニヤには 1) モスクワ商人、2) ヴォログダ商人、3) トゥーラ、クールスク、ヴォロネジ商人、4) トボリスク商人、5) イルクーツク商人、6) ヴェルフネウディンスク商人の 6 カンパニヤが存在した。貿易開始直後モスクワ商人リシェトニコフ **Решетников** は商品を早く売捌こうという意図から自分の商品をより安い交換比率

²⁴ Радищев А. Н. Указ. соч., С. 98-99.

²⁵ Кудрявцев Ф. А., Силин Е. П. Указ. Соч., С. 53-54.

²⁶ Радищев А. Н. Указ. соч., С. 74-75.

²⁷ Кудрявцев Ф. А., Силин Е. П. Там же.

²⁸ Макарова Р. В. Экспедиции русских промышленных людей в Тихом Океане в XVIII веке // Вопросы географии, история географических знаний. сб. 17. М., 1950. С. 24-26.

²⁹ Радищев А. Н. Указ. соч., С. 66.

³⁰ Андриевич В. К. Указ. Соч. С. 210-211.

で中国商品と交換し、他のロシア商人に損害を与えた。これを契機にロシア商人たちは各カンパニヤからカンパニオン **компанион** (組合員) と呼ばれる全権者 1 名を選出するようになり、このカンパニオンたちが共同でロシア商品の評価し、一定品質のロシア商品と交換する中国商品の評価額を規定することになった³¹。しかし他の商人たちはカンパニオンの決めた交換比率を守らず、混乱は続いた³²。

このような混乱が生じた原因は①中国商人の商組織 **фузы** が強固であったこと、②ロシア商人は遠隔地からキャフタにやってくる商人ほど商品を早く売捌く傾向にあったこと³³、③茶の需要が急激に拡大し、中国商人がロシア商人の足元を見て交渉を行ったことによる。

こうした混乱のため貿易再開直後の取引高は 200 万から 300 万ルーブルの間を推移してそれほど伸びなかった (表 1)。特に③に関してはキャフタ税関監督官 **Вонифатьев** が 1800 年 10 月 29 日報告の中で「ほとんど全員が中国人から茶を求め、そのため彼らは中国人にあらかじめ暗示して、古い料金表に基づいてその年の納税を行おうとし、それによって皆が利益を計上しようとしたと私は結論した；マイマチンへの茶の搬入は日に日に増え、11 月 1 日までにマイマチンに運ばれた両方の種類〔白毫茶と緑茶一拙註〕は 15000 箱³⁴を数えた；このような膨大な茶の割合から、私はわが国の商人たちに対し、彼らがより適切な価格で中国人たちと交換して手に入れるべきことを暗示しようと努めた」³⁵と述べている。ヴォニファチエフ報告は南京木綿に代わって茶の輸入があまりにも増えたために、ロシア商人が不利な取引を強いられていた現状を指摘している。茶の需要が増えたということは、需要が限られていた南京木綿の輸入と異なり、ヨーロッパ・ロシアからも中国商品の需要が出てきたということであった。従って、再開後のキャフタ貿易はそれまでのローカルな性格からロシア市場と密接に結びついた重要な貿易へと明らかに変化しつつあった。

一方中国商人は清政府の秘密指示によって、每晚マイマチン長官 (**Дзыргучей**) 宅の集会で商品需要の情報を収集し、搬入商品を減らして価格を釣り上げるよう命じていた³⁶。1823 年キャフタで発見された 17 項目から成る清の秘密指示書の内容は中国商人の情報を厳しく規制するものであり³⁷、ロシア人との取引にはロシア語を使うようにさせ、ロシア人たちに中国語を学ばせない努力まで行っていた³⁸。茶の輸入拡大とロシア商

³¹ Субботин. Чай и чайная торговля в России и других государствах. СПб., 1892. С. 458.

³² Силин Е. П. Указ. соч., С. 99.

³³ Паллас. Указ. Соч. С. 184; РГИА. Ф. 13. оп. 2. д. 124. Л. 3-8об.

³⁴ 茶を梱包する“箱 место”は商品の書付帳で計量単位としてしばしばそのまま用いられている。一般に место の重量は 2 Пуд ÷ 32.78 キロとされているが、記録によって若干の変動があるため、あくまで近似値的な指標である。

³⁵ РГИА. Ф. 13. Оп. 2. Д. 378. Л.1а-3об.

³⁶ Силин Е. П. Указ. Соч. С.113

³⁷ РГАДА. Ф. 183. Оп. 1. Д. 32. Л. 1-5об.

³⁸ Осокин З. М. На границе Монголии. СПб., 1906. С. 58. Екатерина・アヴデーエヴァ＝

人の足並みの乱れがこの時期の混乱に拍車をかけた。こうした状況から 1800 年キャフタ貿易の新料金表と、19 項目から成る「キャフタ税関・商人が中国と貿易するさいに行うべき規則」が制定された³⁹。この規則内容からは取引におけるロシア商人の結束の弱さと秘密保持の難しさに対する政府の憂慮が読み取れる。この規則はカンパニオン制度の強化をもたらしたが、1801 年のカンパニオンとカンパニヤの商人たちの対立に見られるように⁴⁰、強い統制は商品需要の変化という市場の自然な流れを妨げる弊害も持っていた。カンパニオンの弊害を防ぐため、役人の間からはカンパニヤでなく会社組織を設立すべきではないかという意見が生じた⁴¹。これに対し、内務大臣ストロガノフ Григорий Строганов は好意的反応を示しつつも、会社組織の設立がキャフタ貿易に依存するシベリア商人の不满を引き起こすかもしれないとして却下している⁴²。茶の輸入拡大によってキャフタ貿易の重要性が増す中、イルクーツク商人はヨーロッパ・ロシア商人との激しい競争にさらされつつ、既存のカンパニヤ組織のまま貿易を行わざるを得なかった。

2. イルクーツクの中継交易網

貿易中断によって流通の流れは再びイルクーツクへ戻ってきた。1792 年に 1 万台を大きく割り込んでいたイルクーツクの通過馬車数は⁴³、19 世紀以後大きく増加した。イルクーツク交易所の記録によると、1793 年の利用店舗が他都市商人 10 名で 18 店舗だったが⁴⁴、1798 年にはイルクーツク商人、他都市商人を含めて 585 店舗へと増加した⁴⁵。

この時期イルクーツク交易所で取引された商品は (1) ヨーロッパ・ロシア製ろうそく、松脂、鏡、銅・鉄製品、金銀製品、雲母、筆記用品、塗料、にかわ、モスクワの粗毛糸・タフタ・亜麻布・色木綿、サージ、粗製ラシャ、手袋、帽子、靴下、ロシア革、ガラス製品、チェルカスイ産煙草、鉄砲 (2) ヨーロッパ製品：ドイツ製梳毛糸・タフタ・ビロード、オランダ・スペイン製ラシャ、白粉、イギリス製かみそり、プロイセン茶器、ドイツの針・アニス（香辛料）、フランスのブルーネ、ワイン、蒸留酒 (3) 中近東商品：コンスタンチノーブルの干しぶどう、米、イチジク、ナッツ類 (4) シベリア産品：毛皮（レナ川・アンガラ川流域のリスとオコジョ、クズリ、狼、ウサギ、ケナガイタチ、熊、キツネ、オホーツク地域のビーバー、オットセイ）、ロシア革、牛皮、鉛、(5) 中国商品：綿製品、絹製品、

パレヴァヤの回想によれば、1804 年に夫ピョートル・アヴデーエフとともにキャフタを訪れた頃、ロシア商人と中国商人はロシア語で商談をしていた。しかしここで商うロシア商人たちは自分の子供に中国語を習わせていたという。Авдеева-Полевая Е. Указ. соч., С. 50.

³⁹ РГИА. Ф. 13. Оп. 2. Д. 228. Л. 6-20.

⁴⁰ РГИА. Ф. 13. Оп. 2. Д. 464. Л. 16.

⁴¹ РГИА. Ф. 13. Оп. 2. Д. 998. Л. 6.

⁴² РГИА. Ф. 13. Оп. 2. Д. 998. Л. 15—16.

⁴³ Радищев А. Н. Указ. соч. С. 66.

⁴⁴ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1158. Л. 49-об.*この年のイルクーツク商人の交易所利用に関する情報は記載されていない。

⁴⁵ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1202. Л. 56-57.

磚茶、白毫茶、緑茶、白砂糖・氷砂糖であり⁴⁶、品目構成はキャフタにおける輸出入商品の構成とほぼ同じである⁴⁷。イルクーツクを通過する多様な地域の商人は毛皮だけでなく様々な商品を商い、ヤクーツク、キャフタ、ヨーロッパ・ロシアと広大な地域で活動を行った。

交易所記録には 1802—1822 年に通過した馬車の荷主と方向のデータが残されている(表 5)。この統計によれば、イルクーツク交易所を通過した荷馬車の数は 1802 年 11121 台、1803 年 11327 台、1804 年 10113 台、1805 年 14338 台、1809 年 17565 台、1810 年 18669 台、1813 年 11702 台、1815 年 12796 台、1822 年 12756 台である。1810 年を境に通過台数が減少しているのは交易所における取引の比重が低下したため、イルクーツクにおける取引の中心は交易所からバザール、店舗へと移っていった⁴⁸。通過記録に基づいて参加商人の地域・身分を分析すると、いくつかのグループに分けられる。(1) 地元イルクーツク商人を中心とするイルクーツク県グループ。特にイルクーツク商人の比重は大きく、1802 年に全体の 20.38% だったが、その後は若干減少し、15% 前後を推移している。イルクーツク商人の商品出荷方向はロシア向けが最も多く、続いてキャフタ、ヤクーツク方面であった。ヤクーツク方面へは食料品・物資の供給と毛皮商品の購入を行い、キャフタ貿易だけでなくヨーロッパ・ロシア市場とも緊密に取引していたことが見て取れる。ギルド別では 1802—1804 年第 2 ギルドと第 3 ギルドの比重が大きかったが、1805 年から第 1 ギルドの比重が急増する⁴⁹。キャフタ貿易の参加資格が第 1 ギルドだったにも関わらず、この時期まで地元イルクーツクのキャフタ貿易参加者は第 2・第 3 ギルドが主体だった⁵⁰。イルクーツクの第 1 ギルドそのものが 1805 年までムィリニコフ Н. П. МЫЛЬНИКОВ とミチューリン П. Д. Мичурин のみであり、このうち交易所記録に名前が見えるのはムィリニコフのみだった。このためイルクーツク商人のキャフタ貿易の主体は第 2 ギルドだった。しかし 1807 年キャフタ貿易参加資格を第 1 ギルドに厳しく制限する詔勅が出され、1809 年には第 1 ギルドに昇格した元第 2 ギルド商人たちがイルクーツク交易所の中心となっている。町人の参加は少ないが、これら町人の多くがかつての商人身分か、後に商人身分へ移動していった人々である点は興味深い。これは 1775 年の詔勅「Османь政府との和平締結時に皇帝陛下より賜った各身分へのお慈悲 Высочайше дарованных разным сословиям милостях по случаю заключенного мира с Портою Оттоманской」以降、商人の身分が資本金と納税

⁴⁶ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 45. Л. 565-567об., Д. 46. Л. 111-116об., Д. 47. Л. 705-712, 714-720, 722-728, 738об.-751об., Д. 48. Л. 240-276об., Д. 50. Л. 644-659.

⁴⁷ РГАДА. Ф. 183. Оп. 1. Д. 84. Л. 2-17об.

⁴⁸ Алексей Мартос. Письма о Восточной Сибири. М., 1827. С. 156. Александров М. Воздушный тарантас или воспоминания о поездках по Восточной Сибири. Иркутск (Лето 1827-го года) // Сборник историко-статистических сведений о Сибири и сопредельных ей странах. СПб., 1875. т. 1. вып. 1. С. 15.

⁴⁹ 1802 年は第 1 ギルド 82 台、第 2・第 3 ギルドが 2225 台、1803 年第 1 ギルド 95 台 (第 2 ギルドとの共同商品含む)、第 2・第 3 ギルドが 1505 台、1804 年第 1 ギルド 65 台、第 2・第 3 ギルド 1709 台であった。

⁵⁰ このからくりについてはラディーシチェフが指摘している。Радищев А. Н. Указ. соч., С. 66.

能力によってのみ規定される法律が制定されたためである。したがってこの時期の‘商売人 торговые люди’には手代・仲介人として商人に雇用されていた町人身分も多い点に留意する必要がある。

イルクーツク商人以外では以下のグループが見られる。(2) ロシア・アメリカ会社。1800年に本社がペテルブルグに移転され、イルクーツク支店が開設された直後は10%近い比重を占めたが、1805年を境に急激に減少した。特にキャフタ向けの減少が著しく、ヤクーツクとロシアとの流通へ特化した。(3) トボリスク商人 (4) カザン、アルスコエ、マルムイシのタタール商人。(5) イルクーツクとの地縁的結びつきの強いヴォログダなどの北ロシア商人。(6) 比重が最も高いモスクワ商人。イルクーツク商人はこれら多様な地域の商人と激しい競合関係にあり、とくにヨーロッパ・ロシア商人たちは資金面で有利な立場にあった。

所属を登録している地元以外の場所で商いをする商人を他都市商人 *иногородный купец* と呼ぶ。18世紀からイルクーツク商人は他都市商人がイルクーツクやキャフタの取引に参加することを忌避した。1768年エカテリーナ立法委員会 *Уложенная комиссия*⁵¹でイルクーツク商人代表 A. И. シビリャコフがキャフタ貿易独占権の許可を求めたのは、ヨーロッパ・ロシア商人の活発な参入と、イルクーツク商人のキャフタ貿易依存が理由だった⁵²。しかしイルクーツク商人が遠隔諸都市へ出かけず、ヨーロッパ・ロシアから持ち込まれた様々な商品を他都市商人から購入する状況では、他都市商人の排除が不可能だった。そこで1768年春・秋2回のイルクーツク定期市開催が決定され⁵³、1775年から実施された⁵⁴。定期市期間は他都市商人全員が中国商品以外のロシア商品・ヨーロッパ商品を自由に取引し、先住民と直接毛皮を取引することが許可された。一方定期市期間外に小売販売をしてはならないことも命じられた⁵⁵。定期市の存在は他都市商人が定期市以外の場でヤサク民と毛皮取引することを制限し、イルクーツク商人による毛皮入手独占を可能にした。通常イルクーツク商人は9月からリスなどの毛皮商品の買付けに出かけ、トゥンカ、バルグジン、イリムスク、ニジュネウディンスク、ヴェルフネウディンスクへ代理人を送ることもあった。11月にはトゥンカ、カメンカ、バラガンスクからブリヤート人たちが毛皮商品を持って往来し、ブリヤートの公 *Князьки* は大規模に商品を持ちこみ、イルクーツク商人

⁵¹ 1766年12月の布告により召集された委員会で、元老院、参議院、郡・市の代表、国有地農民などが招かれる大規模なものであった。イルクーツク県代表は都市民5名、移住者1名、異教徒2名の計8名であった。田中陽兒、倉持俊一、和田春樹編『世界歴史体系 ロシア史 2 18世紀—19世紀』山川出版、1994年、p. 73-74; Головачев П. Сибирь в Екатерининской комиссии. Этюд по истории XVIII века. М., 1889. С. 13.

⁵² Кудрявцев Ф. А., Силин Е. А. Указ. соч., С. 54-55

⁵³ Андриевич В. К. Указ. соч., С. 192-193.

⁵⁴ Пежемский П. И., Кротов В. А. Иркутская летопись. Иркутск. 1652—1856 г. 1911. С. 103.

⁵⁵ Кудрявцев Ф. А., Силин Е. А. Указ. соч., С. 63; Черных А. В. Ярмарки Иркутской губернии. Иркутск, 1926. С. 1-2.

が彼らのアパートに商品を見に出かけた。少量の商品は橇で運ばれ、各家庭にリス、熊、テン、狼、キツネ、麝香が直接持ち込まれた⁵⁶。こうした地元の毛皮交易システムにより、1822年キャフタ貿易における輸出毛皮の80%をイルクーツク商人が運び込んだ⁵⁷。資金面に劣るイルクーツク商人は地元の毛皮流通を押さえることによって、ヨーロッパ・ロシア商人とは別個の利益を確保した。

毛皮のシェアを押さえていたにもかかわらず、他都市商人の参入はイルクーツク商人の懸案であり続けた。1796年1月3日、イルクーツク交易所所長アプレルコフ М. П. Опрелков はソリヴィチェゴドスク商人ピヤンコフ В. Пьянков が定期市期間終了後も小売取引を続けているとして、イルクーツクでの商売を禁じた⁵⁸。1814年にはイルクーツク交易所に他都市商人を入れない指示書 инструкция が出され、他都市商人の取引を定期市期間に限定する規則の再確認、店舗販売した商品のマギストラートへの届け出、賄賂防止など10項目を定めた⁵⁹。さらに1817年他都市商人が商品を不法に取引したとして、イルクーツク・マギストラートが他都市商人の商品差し押さえ命令を出す事態となった⁶⁰。しかしこの件は当時マギストラートと対立していた県庁がマギストラート命令を取り消し、マギストラート職員を裁判にかけて他都市商人の品を交易所に保管することを命じた⁶¹。この件はのちにニカノール・トラペズニコフが控訴し、スペランスキーによって元老院へまわされた。他都市商人に対するこのような規制は、当時ニジェゴロド定期市・イルビート定期市へ出かけるイルクーツク商人が少なく、そのために他都市商人がロシア商品、ヨーロッパ商品を自由に取引して地元商人に与える損害を憂慮したからに他ならない。

事実、イルクーツク交易所の記録はイルクーツクで活動する他都市商人の活発な商取引を示している。正式に登録されていた商人は年間10人前後であったが、実際の取引参加者数はその何倍にも上った。例えば1805年イルクーツク市団に正式登録せずに交易所で商っていた他都市商人はネジン商人1名、モスクワ商人6名、クールスク商人1名、カルーガ商人3名、トゥーラ商人1名、ヴォロネジ商人1名、ヴァズニキ商人2名、ヴォログダ商人3名、ヴェルハヴァジエ商人4名、トチマ商人5名、ヴェリカウスチュグ商人8名、ソリヴィチェゴドスク商人3名、ヤレンスク商人1名、カザン商人3名、エカテリンブルグ商人2名、トボリスク商人8名、タラ商人2名、トムスク商人6名、ハルモゴールィ商人1名、イエニセISK商人13名（町人・農民・アメリカ会社手代除く）、計74名だった⁶²。

⁵⁶ Авдеева-Полевая Е. Указ. соч., С. 16-17.

⁵⁷ Шахеров В. П., Козлов И. И., Гаврилова Н. И., Антонов В. С. Таможенное дело в Восточной Сибири и Забайкалье. Иркутск, 1999. С. 41.

⁵⁸ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1199. Л. 1-об.

⁵⁹ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1714. Л. 16-20об.

⁶⁰ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1908. Л. 28-29об.

⁶¹ Вагин В. И. Исторические сведения о деятельности графа М. М. Сперанского в Сибири с 1819 по 1822 г. Т. 1. СПб., 1872. С. 322. Мэ́гистрат構成員はイルクーツク商人であり、イルクーツク県知事トレスキンと対立していた。

⁶² ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1443. Л. 1об.-25об.

これに対し、同年登録された他都市商人はモスクワ商人 1 名、ヴォログダ商人 1 名、トチマ商人 2 名、ヴェリカウスチュグ商人 4 名、ソリヴィチェゴドスク商人 2 名、ヤレンスク商人 1 名、不明 1 名の計 11 名だった⁶³。こうした傾向は 1822 年の交易所記録まで変わらない。イルクーツクで商う他都市商人にとって「小売販売」と定期市での「毛皮取引」以外にマギストラートに正式登録する必然性がほとんどなかったためであろう。そんなことをしなくても他都市商人はキャフタ貿易を通じて莫大な商品を取り扱っており、マギストラートの目を盗んだ秘密取引も平然と行われていた。この結果、イルクーツク商人は他都市商人の取引に常に神経質にならざるをえなかったのである。

それではイルクーツク商人は他都市商人に対して閉鎖的なだけだったのだろうか。1792—1827 年イルクーツク・ギルドに登録していた商人の家系を調べると、全く逆の現象を見いだすことができる。18 世紀からイルクーツク商人グループを補充したのは北ロシア諸都市の商人たちであった。В. П. シャヘロフによると 18 世紀末から 19 世紀 30 年代にかけてほぼ 6 割の家系が入れ替わった⁶⁴。しかし 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてイルクーツク商人に流入してきたのは北ロシア諸都市の商人だけではなく、より多様な地域の商人たちであった。これには 18 世紀後半に隆盛期を迎えた太平洋地域の毛皮狩猟業と、キャフタ貿易にともなう東シベリア商人の増加が影響していた。

1890 年代クールスク商人としてイルクーツクで活動したパレヴォイ А. Е. Полевой が来訪するきっかけとなったのは、叔父であり主人であるゴリコフ И. Л. Голиков がシベリアの徴税代理人となってイルクーツクで活動していたことだった⁶⁵。ゴリコフがシェリホフと太平洋地域における毛皮の共同事業を行っていたことは知られている⁶⁶。パレヴォイはシェリホフと叔父の死後ロシア・アメリカ会社の取締役となり、娘のエカテリーナはイルクーツク第 1 ギルド商人息子 П. П. Аヴдеевへ嫁いだ。同様にトムスク商人プロタソフ Я. Я. Протасов, カルゴポリ商人 А. А. Баранов (1746—1819) も毛皮業者としてイルクーツク商人に移動した人々である。

他のイルクーツク商人の出自はさらに多様な地縁関係を示している。ヤクーツク町人ボルシャコフ И. В. Болшаков, ウートキン А. Уткин, シャポーシニコフ Д. Шапошников, シチュービン Д. Шубин, キレンスク商人クズネツォフ В. И. Кузнецов はもともとイルクーツク県内の毛皮業者だった。同様に富裕なモンゴル・ヤサク民も多く、第 3 ギルドに登録したセミヨン・ポポフだけでなく、冬季のイルクーツクで仲介人・仲買人として働くブ

⁶³ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1394. Л. 61об.

⁶⁴ Шахеров В. П. Экономико-правовые аспекты классово-сословные структуры сибирского города в период позднего феодализма // Экономическая политика царизма в Сибири в XIX—начале XX века. Иркутск, 1984. С. 7.

⁶⁵ Полевой Николай. Очерки русской литературы. Сочинение Николая Полевого, часть I. СПб., 1839. С. XXIV—XXVIII.

⁶⁶ Авдеева-Полевая Е. Воспоминания об Иркутске // Записки иркутских жителей. Иркутск, 1990. С. 56—57.

リヤート人も多かったという⁶⁷。ザバイカリエ地域の町人・農民身分からイルクーツク商人へ移動するケースがあり、マンズール郷農民ココリン Ф. И. Кокорин 兄弟などが見られる。これはイルクーツクにおける来訪農民による家畜・毛皮・食料品販売が盛んだったため、ザバイカリエ地域だけでなくソリヴィチェゴドスク、ヴィチェゴツキー出身農民からの移動も見られた。西シベリアからはコルィヴァン商人ヴェルハトゥーロフ М. А. Верхотуров, バルナウル商人トレチャコフ А. А. Третьяков, トボリスク第1ギルド商人 Е. А. Кзнецов がいる。タタール系ではトムスクのウチュガノフ А. И. Утюганов (Утеганов) がイルクーツクで唯一のイスラム教徒商人であり、他にカザン町人ママエフ С. Н. Мамаев の名が見られる⁶⁸。北ロシア諸都市からはヴォログダ商人シェルギン Г. Шергин, トチマ商人ザイツェフ И. В. Зайцев, ラリスク商人チェバエフスキー И. Ф. Чебаевский が見られるが、彼らは他都市商人としての登録を経ずに初めからイルクーツク商人へ登録している。北ロシア諸都市出身者でイルクーツクの他都市商人に登録してからイルクーツク商人へ移った例はヴェリカウスチュグ商人バシン И. П. Басин, ピョートル・ブルダーコフ Булдаков の息子アレクセイの2名だけである。18世紀末から19世紀初頭において、イルクーツク商人の構成に占める北ロシア諸都市出身者の比重は確実に低下する傾向にあり、代わって西シベリア、東シベリアからの流入が増加しつつあった。

このようにイルクーツク商人に占める他都市出身者の割合は非常に大きかった。イルクーツク商人は全体的に「よそ者」が地元の商売に参入することに閉鎖的に見える。しかし他都市商人からイルクーツク・ギルドへの流入が途切れなかったことは、その承認がマギストラート集会における地元商人の許可を必要とすること、毛皮産業と密接な関係にあることを考慮すると、極めて開かれた構造を持っていたことを示している。イルクーツク商人は毛皮流通を押さえて他都市商人の利益を制限しようとした一方、毛皮以外の商品を手に入れるために他都市商人とも相互に取引しなければならず、緊密なビジネス・パートナー関係を保持していた。イルクーツク・ギルドに流入した他都市出身者もその手代・親戚を通じて広範な地縁関係を持ち、キャフタ貿易の成長と中継交易がイルクーツク商人のネットワークを形成した。

イルクーツク商人の中でも「古くからの住民」は中継交易の担い手としてアンガラ川、レナ川の河川輸送において重要な役割を果たすようになった。アンガラ川—バイカル湖—キャフタのルートではドウドロフスキーとシビリャコフが活躍し⁶⁹、特にイヴァン・ドウドロフスキーとステパン・ドウドロフスキーの兄弟は18世紀末にエニセイスク商人クヴァキン、イルクーツク商人ミハイロ・サヴァテーエフらと共同で船舶業を行い、1800年から独立してバイカル湖・アンガラ川・エニセイ川輸送に従事し、キャフタとシベリアを結ぶ河川運

⁶⁷ Авдеева-Полевая Е. Записки и замечания... С. 21.

⁶⁸ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1443. Л. 1об.-25об.

⁶⁹ Шашков С. Сибирское общество в начале XIX в. // Дело. 1879. № 1. с. 67.

搬業に従事した⁷⁰。1824年1月5日バイカル湖を訪れたアレクセイ・マルトスによれば、商船は1本マストで風によって向きを変えることも困難な稚拙なものだったらしい。バイカル湖ではしばしば強風による難破があったにもかかわらず、商人たちは原始的な船で1万プード [=163800 kg : 拙註] もの商品を積んでバイカル湖を航行した⁷¹。またティモフェイ・マクシモヴィチ・バスニン Баснин は、エニセイ水系のイリムスク要塞に住んでいたところにアンガラ川輸送に従事するようになり、この仕事がきっかけでイルクーツク商人 A. П. シーズィフと契約を結び、のちにイルクーツク商人として頭角を現していったと自伝で記している⁷²。

資金不足、ヨーロッパ・ロシアからの遠隔地という様々なマイナス要因を内包しつつ、イルクーツクの地元商人は毛皮利益独占という防御策を取り、他都市商人の絶え間ない流入を受け入れる開放的構造によって中継交易に主体的な役割を果たしたといえる。

3. キャプタ貿易とイルクーツクを取り巻く商環境の変化

19世紀のキャプタ貿易は輸出入品目の変化が顕著となり、イルクーツク商人が商う商品にも大きく影響した。しかし一方で同時期に起こったイルクーツク市団と行政の対立は地元の有力商人追放という形で深刻な影響を与えた。経済・行政両面が地元商業にもたらした影響はいずれも分かちがたく複雑に絡み合っており、片方の影響にのみ着目しては本質的な変化を把握することは困難である。したがってここでは各商人家系の盛衰に影響した要因をペステリ・トレスキン時代の役所と商人の対立、キャプタ貿易の法的変化、輸出入品目の変化の観点から検証してみる。

シベリア総督ペステリ、イルクーツク県知事トレスキンとイルクーツク市団の対立に絡む職権濫用事件はソビエト史学の中で「階級闘争」という2項対立の図式で描くことが多かった⁷³。もともと東シベリアでは行政組織が未発達であり、すでに18世紀から行政官による圧迫とイルクーツク市団の密告による行政官更迭が何度も繰り返されていた⁷⁴。こうした背景の中で1806年3等官イヴァン・ボリソヴィチ・ペステリ Пестель (1765-1843) がシベリア総督に、中央郵便局職員ニコライ・イヴァノヴィチ・トレスキン Трескин がイルクーツク県知事に任命された。ザクセン出身の官僚であったペステリはルーテル派の峻厳な人物であり、ペテルブルグ中央郵便局長職などを経てアレクサンドル1世の寵臣アラクチャーエフ A. A. Аракчеев の庇護下にシベリアを支配するための強い行政権力を握っ

⁷⁰ Краткая энциклопедия по истории купечества и комерции Сибири. Т. 1. Кн. 2. Новосибирск, 1994. С. 136-137.

⁷¹ Алексей Мартос. Указ. соч., С. 136-137, 157-158.

⁷² ОПИ ГИМ Ф. 468. Оп. 1. Д. 2. Л. 2об.-5об.

⁷³ История Сибири. Т. 2. Л., 1968. С. 453-456; Очерки русской литературы Сибири. Т. 1. Новосибирск, 1982. С. 187-195.

⁷⁴ Пежемский П. И., Кротов В. А. Иркутская летопись. Иркутск, 1911. С. 77-89; Вагин В. И. Указ. соч., С. 572-573.

た⁷⁵。ペステリの統治に対する後世の評価は「過去の全ての完結であり、専制と抑圧を統治手段に用いようとする最後の計画であった・・・彼はその信念によって長官権力の擁護、あらゆる支配権の確立を目標にしていた。社会は無言の服従に沈殿しなければならなかった」とされている⁷⁶。

トレスキンに対するイルクーツク商人の反抗的態度は「商人たちははじめ彼がどんな人物なのか確かめようとした。一良い人物なら結構だが、まずい人物なら交替させることもできるだろう」⁷⁷という一文に集約される。И. Т. Карашникоフがその良さを認めた「商人の独立不羈の性質」も、トレスキンにとっては役人に対する侮辱でしかなかった⁷⁸。トレスキンに対する市団の不満は様々であり、商人にとって特に問題だったのは市団の決定に介入しようとしたことである。1807年、イルクーツク商人の重鎮であったミハイロ・ヴァシリエヴィチ・シビリャコフの市長選出⁷⁹にトレスキンは不満を示し、選出を取り消してサヴァテーエフを次期市長に決めた。この出来事から1808年シビリャコフを中心とするイルクーツク商人団が最初の嘆願書をペテルブルグのペステリ総督へ送ったが、嘆願書はペステリによって握りつぶされた⁸⁰。この一件から、トレスキンは有力商人であるミハイロ・シビリャコフ、ニコライ・シビリャコフ、ムィリニコフ、ドウドロフスキー、オドゥエフスキーをザバイカリエ地方へ流刑にした⁸¹。商人キセリョフ Киселев はトゥルハンスク商人・徴税代理人でイルクーツクの他都市商人であるペレドフシチコフ К. Передовщиков の裁判に関して反トレスキン側であったことから精神病院送りにされ、そのまま行方不明となった⁸²。

トレスキンがПартия (仲間) と呼んで嫌い、追放した商人たちは毛皮産業と

⁷⁵ Ремнев А. В. Прокурор Сибири. Иван Борисович Пестель // Вопросы истории. 1997. № 2. С. 142.

⁷⁶ Щеглов И. В. Указ. соч., С. 224.

⁷⁷ Вагин В. Указ. соч., С. 572.

⁷⁸ Калашников И. Т. Записки Иркутского жителя // Русская старина. №. 7. СПб., 1905. С. 200.

⁷⁹ Куприянов А. И. Правовая культура горожан Сибири первой половины XIX в. // Общественно-политическая мысль и культура Сибири в XVII- первой половине XIX века. Новосибирск, 1990. С. 92. 市団だけでなく、シビリャコフ自身が政府への嘆願を積極的に行い、地元商人の中で法律によく通じたリーダー的人物として認識されていた。

⁸⁰ Щеглов И. В. Указ. соч., С. 243.

⁸¹ Вагин В. И. Указ. соч., С. 573; Краткая энциклопедия по истории купечества и коммерции Сибири. Т. 4. Кн. 1. Новосибирск, 1997. С. 48; Баснин П. П. Из прошлого Сибири. Мученики и мучители. Публикация П. Т. Баснина // Исторический вестник. 1902. ноябрь. С. 570. ドウドロフスキーについてはステパン・フォードロヴィチ・ドウドロフスキーのことと推測される。

⁸² Баснин П. П. Указ. соч., С. 566-569. キセリョフの友人であった第1ギルド商人コンスタンチン・ペトローヴィチ・トラペズニコフ、П. Т. Баснинは彼の失踪を心配し、家族と親戚も行方を捜索したが、キセリョフは発見されなかった。当時病院視察官であったトレチャコフは、トレスキンの罷免後にキセリョフの失踪責任を問われて告発された。Баснинはキセリョフが殺害されたことを暗示する記述をしている。

キャフタ貿易の共同事業によって共通の利益で結ばれていただけでなく、姻戚関係を通じて他のイルクーツク商人とも親交が深かった。このため彼らの追放は市団の構造を根本から揺るがすものだった。しかしイルクーツク商人セミヨン・セミヨノヴィチ・ドウドロフスキーはトレスキン時代を有益な行政措置が行われた時代だったと賞賛しており⁸³、中には恩恵を蒙ったイルクーツク商人たちが若干いたことも事実である。しかしそれはあくまで市団の反論を封じた重苦しい規制の中でのものだった。このような状態に対する不満から1818年 K. П. Трапезニコフを中心とする嘆願書が成功し、1819年ペステリ、トレスキンの罷免とミハイル・ミハイロヴィチ・スペランスキーМ. М. Сперанский のシベリア総督任命が決定された⁸⁴。

ところでトレスキンによるイルクーツク商人の追放は彼等の経営にどのような影響を及ぼしたのか。個々の事例の前に全体的な変化について見ていこう。シビリャコフとムイリニコフがザバイカリエへ流刑されたのは1809年であり、イルクーツク商人に対するトレスキンの「抑圧」が本格化するのもこの時期である。一方ギルド商人の構成を見ると、1807年と1808年を境に急激な変化が起こっている。1807年全体で190家族だったギルド商人は1808年123家族に減少した。ところが、第1ギルドは4家族から16家族に急増し、表面上はイルクーツク商人の富裕化現象が起こったように見える。特に減少したのは第2ギルド、第3ギルドであり、かつての第2ギルドが第1ギルドへ上昇し、多くの第3ギルドが町人へと移動した(表4)。これは繰り返し述べるように1807年の詔勅によるものである⁸⁵。交易所記録を見てもイルクーツク商人の荷馬車は1805年の2326台から1809年の2510台へ増加している(表5)。そのうちキャフタ向け商品の比重は変わっていない。

しかしこのようなイルクーツク・ギルド商人に見られる「富裕化現象」は一時的なものだった。1812年に第1ギルド11家族、全体数97家族だったのが、1813年には第1ギルド4家族、全体で61家族へと激減している。1807年以後一部商人が第1ギルドへ移動することによって下部構造を占める第2・第3ギルドは減少し、それからまもなく第1ギルドも衰退していったことになる。イルクーツク・ギルドの減少は商人からの税収減少をもたらすために、行政にとっても重要な課題であった。これに対し、1817年11月29日イルクーツク市議会側はキャフタ貿易を地元第3ギルド商人にも許可してほしいという内容の報告を提出した⁸⁶。第3ギルドの意見はキャフタ貿易が「地元の唯一の貿易窓口」であり、地元商人を他都市商人より優先すべきという18世紀以来の主張に基づいている。しかしこの報告はイルクーツク県庁によって退けられた⁸⁷。一方で県庁は1814年キレンスク郡⁸⁸にお

⁸³ Александров М. А. Указ. соч., С. 34. Семион・セмионо́вич・Дудро́вскийはステパン・ヤコヴレ́вич・Дудро́вскийと別系統のイルクーツク商人。

⁸⁴ Щеглов И. В. Указ. соч., С. 243.

⁸⁵ Шахеров В. П. Указ. соч., С. 70.

⁸⁶ РГИА. Ф. 1264. Оп. 1. Д. 75. Л. 50-59.

⁸⁷ РГИА. Ф. 1264. Оп. 1. Д. 75. Л. 64.

⁸⁸ イルクーツク近郊、レナ上流域に位置する郡。

いてイルクーツク第3ギルド商人が毛皮取引することを許可する特別条例を出している⁸⁹。イルクーツク市への商人の集中、キレンスク郡における商人の不足、毛皮産業の担い手である地元農民と買付けに来る来訪商人の構造、取引における他都市商人と第3ギルドの法的権利をめぐる諸問題について総督ペステリは自ら内務大臣に説明し、他都市商人であるイルクーツク第3ギルドがキレンスク郡で毛皮取引することの有用性を文書で訴えた。これにより、イルクーツク第3ギルドは毛皮を農民から直接購入できるようになった。

一方、トレスキンによって流刑された商人たちの経営は明暗が分かれた。シビリャコフ家はロシア・アメリカ会社の50株(2万ルーブル相当)を所有し、バイカル湖の船舶業、ネルチンスク工場の鉛・銅の運搬と工場への食料供給を請負っていた。しかし19世紀初頭の記録にはキャフタ貿易との関連を証明する具体的な数字は出てこない⁹⁰。キャフタの関税記録にシビリャコフ家の名が出てくるのは1820年頃からである(表6-2)。家長であるミハイロ・ヴァシリエヴィチはネルチンスクへ流刑されてから1814年に亡くなるまで第1ギルド商人であり続けた。このようなことが可能だったのは、彼が流刑されたネルチンスクがその請負地域だったためである。1812年ペステリはシビリャコフがネルチンスク工場と工場局の集落を訪れ、塩の査察をするのを「必要のために」許可した⁹¹。その翌年、ペステリは「シビリャコフを塩の請負業から解雇することはできない」と金融省に回答している。このような流刑地でのシビリャコフの事業活動を可能にしたのはその大家族経営だった。流刑時にミハイロ・ヴァシリエヴィチの家族は息子と孫を含め計11名がギルドに登録されていた⁹²。ミハイロ自身は家族の奔走にもかかわらず1814年流刑地で亡くなったが、家族は1816年まで彼の名で第1ギルドに登録し、1817年から三男クセノフォンが家長となって事業を継続し、キャフタ貿易への積極的参加により事業を拡大した。

ニコライ・プロコピエヴィチ・ムィリニコフ(1745-1815)は18世紀後半からカムチャツカで狩猟業を行い、毛皮取引による莫大な富を貯え、ロシア・アメリカ会社の株132株(132000ルーブル相当)を所有していた⁹³。彼の名はイルクーツク交易所の記録に頻繁に見られ、大規模なキャフタ貿易を行っている⁹⁴。1809年にはキャフタ方面だけでなくヤクーツク方面へも商品を取引していた。しかし流刑によってムィリニコフ家の事業は傾き、1814年家族は町人へ移動した⁹⁵。その理由はニコライの事業を一手に引き継いでいた孫のイヴァン・ドミートリエヴィチが急死したことと、家族内に有能な人材がいなかったため

⁸⁹ РГИА. Ф. 18. Оп. 4. Д. 84. Л. 1-17, 18-19об.

⁹⁰ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1568. Л. 13-об.

⁹¹ Вагин В. И. Указ. соч., С. 19-20.

⁹² ГАИО. Ф. 308. Д. 86. Л. 1-13.

⁹³ Краткая энциклопедия по истории купечества и коммерции Сибири. Т. 3. Кн. 1. Новосибирск, 1996. С. 154.

⁹⁴ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 94. Л. 1-15об., Д. 1356. Л. 1об.-22, Д. 1443. Л. 1об.-25об., Д. 1535. Л. 1об.-23, Д. 1641. Л. 1об.-34об., Д. 1682. Л. 1-18, Д. 1803. Л. 1-17, Д. 2274. Л. 1-14об.

⁹⁵ ГАИО. Ф. 308. Д. 111. Л. 1-10.

らしい⁹⁶。ムイリニコフ家はシビリャコフ家のような家族経営の結束を維持できず没落した。同様にドウドロフスキー家も 1809 年ステパンの死を境に家族全員が町人へ移動した。ムイリニコフ家とドウドロフスキー家は流刑されたことによって事業をほとんど潰す結果となり、最も大きな被害を蒙った。

流刑商人がギルド商人から町人身分へと移動する一方、トレスキン時代に安定した商取引の維持に成功したイルクーツク商人もいた。ルィチャゴフ家、メドヴェードニコフ家、トラペズニコフ家、ミャフカストゥーポフ家はいずれも 18 世紀後半からイルクーツクで商業活動を行っていた「古株」商人であり、1810 年代も一定の取引高とギルド身分を維持した。特にニコライ・ムイリニコフ **Мыльников** の死後メドヴェードニコフ、シビリャコフ、バスニンがその遺産の監督・後見人となったことは、彼らの事業に豊富な資金を提供する事になったと考えられる⁹⁷。トラペズニコフ家は表面上トレスキン行政と対立せず、その後もイルクーツク商人の中で中心的役割を果たした。バスニン家は 1814 年にキャフタ第 1 ギルドへ登録を移動したが居住地はイルクーツクに残したままキャフタ貿易、特に茶貿易の事業を展開した。

このようにトレスキン時代はイルクーツク商人の有力家系を没落させ、第 1 ギルドを減少させたが、イルクーツク第 2 ギルド、第 3 ギルドの激減という側面から見ると、深刻な影響を与えたのはむしろキャフタ貿易の取引品目変化という経済的要因だった。

キャフタ貿易再開後に茶の需要が激増したことは先に述べた。その後も増加は止まらず 1806 年には茶の輸入が南京木綿の輸入を上回るようになった（表 2）。イルクーツク商人を個別に見ると、ロギン・メドヴェードニコフは 1812 年以降キタイカ（南京木綿の一種）を有利に取引したことで頭角を現している（表 6—1）⁹⁸。しかしそれ以前からキャフタ貿易全体に占める綿製品の割合は減り続け、1815 年には全体の 26.8%にまで落ちこんだ。これに対し輸入に占める茶の割合は 1815 年 69.8%，1820 年には 80.2%に上り、清からの輸入品の大部分を占めるようになった。中国からロシアに輸入された茶の種類は主に白毫茶、磚茶、ジュラン жулан（緑茶）であり、中でも白毫茶が圧倒的の大部分を占めていた（表 6—1、6—2、6—3）。このことから茶の消費が一般のロシア人に急速に広まったことが分かる。さらに 1813 年 9 月 18 日～1814 年 4 月 10 日統計で茶の取引に大きな比重を占めて

⁹⁶ ГАИО. ф. 70. оп. 1. Д. 1582. Л. 1-3. イヴァン・ムイリニコフが事業の委任を受けたのは 1810 年であり、その死後ムイリニコフ家の資本監督にニコライ・バスニン、プロコピイ・メドヴェードニコフ、アレクサンドル・シビリャコフを指名する文書が書かれたのが 1811 年 6 月 1 日以降であるため、イヴァンは 1810 年～1811 年 5 月の間に亡くなったと考えられる。

⁹⁷ ГАИО. Ф. 70. оп. 1. Д. 1582. Л. 25-33.

⁹⁸ Иркутский сиропитательный дом Елисаветы Медведниковой и учрежденный при нем банк. Часть I. Сиропитательный дом. 1838-1888 гг. Иркутск, 1888. С. 2. 1810 年イルクーツク交易所を通過したロギンの商品はキャフタ関連が荷馬車 171 台分に上っている。1813 年の記録は Медведниковы と複数になっているため、ロギン・フョードロヴィチとプロコピイ・フョードロヴィチの共同と考えられる。1815 年以後取引が記されていないのはロギンが 1814 年に亡くなっているためと考えられる。

いたのはモスクワ、ヴォログダ、イルクーツク商人、トボリスク商人、カザン商人であった。一方イルクーツク商人のメドヴェードニコフ、トラペズニコフは茶よりも南京木綿の取引割合が高い。しかしその後の年代の統計を比べると1819年頃からイルクーツク商人の茶の取引量は飛躍的に増加している。これはメドヴェードニコフが磚茶の取引を、トラペズニコフが白毫茶の取引を拡大したためである。さらにこの頃からシビリャコフ家が参入し、イルクーツク商人は徐々に茶貿易へと転換しはじめた。このことからイルクーツク商人はヨーロッパ・ロシア商人よりも遅れて茶貿易へ転換していったことが分かる。これは恐らく茶に高関税がかけられていたためと考えられる⁹⁹。1820年頃まで茶貿易はイルクーツク商人にとって手の出しにくい商品であり、そのためヨーロッパ・ロシア商人とは取引分野が重なることはなかった。

イルクーツク商人の中でもバスニンはやクーツクでの毛皮取引で事業を拡大し、1814年にキャフタ商人へ移動すると、いち早く茶貿易へ転換した。中でも「商売を仕事としてではなく学問のように取り組んでいる」¹⁰⁰と評されたヴァシーリー・ニコラエヴィチは総督ラヴィンスキーらとも親しく、しばしばキャフタ貿易の改善について相談していた¹⁰¹。政商的な手腕を持つバスニン家の成功が他のイルクーツク商人の反発を招いたのは当然ともいえる¹⁰²。しかし茶貿易の繁栄はイルクーツク商人の事業を転換させると同時に、ヨーロッパ・ロシア商人の積極参入とザバイカリエ商人の成長を促す結果になった。トレスキン時代の災禍を生き残ったイルクーツクの第1ギルド層はヨーロッパ・ロシア商人らと茶貿易による共通の利益を追求するようになっていった。

一方、イルクーツク商人の毛皮産業への依存は次第に第2・第3ギルドの商業活動に悪影響を及ぼすようになった。その原因は1820年代におけるラシヤと綿輸出の増加だった(表3)。さらに1807年以来キャフタ貿易からしめ出されたイルクーツクの第2・第3ギルドは中国商品を第1ギルドから購入せざるをえなくなり、卸取引を許されない第3ギルドは不利な小売価格での販売を余儀なくされた¹⁰³。1818年キレンスクでイルクーツク第3ギルドに毛皮の小売購入が許可されたことは第3ギルドがヨーロッパ・ロシア商人の商品と毛皮を取引することを可能にした。しかし1813年キャフタ貿易における外国製ラシヤの輸出が飛躍的に伸び、1815年からロシア製ラシヤの輸出が増加した¹⁰⁴。1820年代にはラシヤがロシア革・皮革製品を上回る主要輸出品目になる。一方ロシアにおける綿製品の生産はラシヤよりも遅れて始まった。18世紀を通じて綿製品は清から輸入され、輸出されることはなかった。1812年にはじめてロシア製の綿が輸出され、その後1820年代にラシヤと並ぶ

⁹⁹ Вагин В. И. Указ. соч., С. 332-333

¹⁰⁰ Александров М. Указ. Соч., С. 42.

¹⁰¹ Э.....ва. Очерки, рассказы и воспоминания. III. Бунт архієпископа Иринея // Русская старина. СПб., 1878. № 9. С. 526.

¹⁰² ОПИ ГИМ. Ф. 469. Оп. 1. Д. 4. Л. 20-21об., 30, 34-35об.

¹⁰³ ГАИО. Ф. 70. Оп. 1. Д. 1913. Л. 1-2об.

¹⁰⁴ 吉田金一「ロシアと清の貿易」p. 56-59.

工業製品として清に輸出されるようになった。И. Носковは「キャフタ経由によってのみわが国の工業製品その他が外国へ販売される道が開けた。・・・その結果ロシアにおいては中国向けの製品を輸出する繊維工場が、数多く出現した」と評価している¹⁰⁵。このような転換はイルクーツクの第 1 ギルド商人にそれほど影響しなかった。この時期彼らはキャフタ貿易に参加するヨーロッパ・ロシア商人を通じて、またはイルビート定期市、ニジェゴロド定期市において直接こうした商品を手に入れることができるようになっていたからである。しかしイルクーツクの第 2 ギルドと第 3 ギルドは毛皮以外の商品を持たず、ロシア商品を手に入れることが困難になっていた。しかもイルクーツクに來訪するヨーロッパ・ロシアの農民が安価なロシア製品をイルクーツクで販売して第 3 ギルドの競争相手となったうえに、第 3 ギルドの唯一の商品である毛皮はまったく購入しなかった¹⁰⁶。このような状況が第 3 ギルドの取引を圧迫していた。

こうしてイルクーツクでは第 1 ギルドがキャフタ貿易によって繁栄する一方、第 3 ギルドがその利益から排除され、毛皮貿易の衰退によって苦境に立たされることになった。A. コルサクは次のように指摘している。「毛皮貿易の衰退は 1820 年代の末からはじまった。これはモスクワ商人が毛皮貿易の商人を犠牲にして、キャフタ貿易の環境を自分たちに有利に導き、工業製品の売行の拡大に成功したからである」¹⁰⁷ このようにキャフタ貿易のギルド制限と工業製品の輸出増加、第 3 ギルドの卸取引禁止の法的規制が第 1 ギルドと第 3 ギルドの格差を拡大していった。

ところでイルクーツク・ギルド数の変化を見ると 1826 年に第 3 ギルドが若干増加している（表 4）。このため一見するとイルクーツク第 3 ギルドの商業環境が改善したかのように見えるが、これは第 3 ギルドの証明書の購入価格を引き下げる緩和措置によって政府が商人数の増加を図ったためである¹⁰⁸。すなわちキャフタ貿易と第 3 ギルドの本質的な関係はほとんど変わらなかったことになる。

このように 19 世紀におけるキャフタ貿易の制限と輸出入品目の変化はイルクーツク商人の構造そのものに大きな影響を与えた。トレスキンの圧力によってイルクーツクの古い有力商人家系が没落したものの、シビリャコフ家は存続し、没落したかつての第 1 ギルドの地位は他のイルクーツク商人によって埋められた。しかしイルクーツク商人の構造全体から見るとより本質的な影響を与えたのはキャフタ貿易の変化であり、ペステリ・トレスキン時代に起こった商人の没落は特定の有力商人家系に限られていた。大商人家系の淘汰と小商人の減少は 1840 年代以降の金鉱業者出現の土壌となっていた。

¹⁰⁵ Носков Н. А. Кяхта. Иркутск, 1861. С. 4; Носков И. Кяхтинская торговля за последние восемь лет. СПб., 1870. С. 3.

¹⁰⁶ РГАДА. Ф. 183. Оп. 1. Д. 54. Л. 3-7об.

¹⁰⁷ Корсак А. Указ. соч., С. 177.

¹⁰⁸ Шахеров В. П. Указ. соч., С. 71.

結論

拙論ではイルクーツク商人をキャフタ貿易との関わりを中心に考察してきた。18世紀のイルクーツク商人は東シベリア、北太平洋地域で狩猟業を展開しつつ、獲得した毛皮をキャフタで中国商品に交換し、この中国商品をヨーロッパ・ロシア商人に売却、その資金を元に再び毛皮を手に入れるという商品の循環システムができていた。

しかしキャフタ貿易による利益は1792年の段階まで安定したものではなかった。キャフタ貿易の中断期間、ヨーロッパ・ロシア商人たちはシベリアで入手した毛皮を直接中央ロシア諸県とヨーロッパ諸国へと運び、それらがイルクーツクを通過しても中継交易による利益は生じなかったからである。このためキャフタ貿易は東シベリア地域の商人が毛皮の転売による利益を獲得するための極めてローカルな意味を持った貿易であり、それゆえに彼らは貿易の再開を政府に訴えた。1792年の貿易再開は、イルクーツク商人がこうした毛皮交易の利益を再び手に入れたという意味で重要であった。日本人漂流民の送還を名目とするラクスマン遣日使節が1791年に派遣され、その後クルーゼンシテルンの世界周航において日本との通商や広東貿易許可の可能性をロシアが求めたのは、キャフタ貿易の中断に危機感を持った商人たちの市場拡大への要望と深くかかわっている¹⁰⁹。

しかしキャフタ貿易の再開と安定化は茶の需要拡大によってその性質を変えた。キャフタ貿易はそれまでのローカルな性格のものからロシアの市場全体にとっても極めて重要な貿易へと変貌し、イルクーツクはヨーロッパ・ロシア商人との激しい競争にさらされることになった。キャフタ貿易の独占に失敗し、損失を恐れたイルクーツク商人は定期市などの措置によって他都市商人の取引を制限という一見きわめて閉鎖的な方策を講じた。しかしイルクーツク商人の家系は中継交易拠点という立地と同じく極めて開かれた構造を示しており、その地縁・血縁関係によって商業活動をますます活発化させた。イルクーツクの古い有力商人家系を核とする第1ギルド商人はこの機能を強化し、河川交通と定期市をコントロールしながら成長していった。

このようにキャフタ貿易の再開と茶貿易の成長がイルクーツク商人の中継交易活動を活発化させた一方、1807年キャフタ貿易の権利を第1ギルドに制限したことは第1ギルドの急増と、第2・第3ギルドの減少をもたらした。続くシベリア総督ペステリ、イルクーツク県知事トレスキンが行った市団への圧迫はさらに第1ギルド商人をも減少させたが、これにより一掃されたのは古い有力商人家系であり、新旧とりまぜた別の商人家系が彼らに取って代わった。しかしより重要であったのはキャフタ貿易の変化であり、輸出入品目の変化は第2・第3ギルド層に決定的な打撃を与えた。1792年のキャフタ貿易再開は相反する2つの結果をもたらしたといえる。第1に、茶貿易の繁栄と工業製品の輸出増加がキャフタ貿易をロシア市場と緊密に連携した重要貿易へと成長させ、これによってイルクーツクの有力な第1ギルド商人は中継機能をますます強化し、成長していったこと、第2に、キャ

¹⁰⁹ 郡山良光『幕末日露関係史』国書刊行会、1980年、p.98-100, 272-274.

フタ貿易がローカルな貿易ではなくなったことによって、第 3 ギルド商人がその利益から排除され没落していったことである。このように 1792 年再開後のキャフタ貿易はイルクーツク商人の家系や取引構造に変化をもたらしたのであり、その変化は 19 世紀前半に生じたロシア市場との関係強化というより広い視座から捉えることが可能であろう。

付記：史料所蔵館略称

ГАИО—Государственный Архив Иркутской Области (国立イルクーツク州古文書館)

ОПИ ГИМ—Отдел письменных источников Государственного Исторического Музея (国立歴史博物館手稿史料課：モスクワ)

РГАДА—Российский Государственный Архив Древних Актов (ロシア国立古代文書館：モスクワ)

РГИА—Российский Государственный Исторический Архив (ロシア国立歴史古文書館：ペテルブルク)